

主論文の要約

論文題目

Deromanticizing California:

Non-Harmonious Ecology in California Literature

(脱ロマン化されるカリフォルニア—カリフォルニア文学における非調和的エコロジー)

氏名 菅井 大地

本研究は、カリフォルニアを舞台とする 20 世紀アメリカ小説（以下、カリフォルニア文学）を取り上げ、それらに見られるカリフォルニア表象における脱ロマン化の諸相を考察し、カリフォルニア文学に共通してみられる非調和的エコロジーの視座を明らかにするものである。しばしばカリフォルニアという土地は、人間の欲望を引き受けるロマン化された理想の土地として描かれる。しかし、カリフォルニア文学における脱ロマン化されたカリフォルニア表象を分析することで、そうした人間中心主義的な土地表象から逸脱するカリフォルニア表象の可能性を指摘することができる。特に、それぞれの作品に描かれる人間の身体と精神の描写、およびそれらと周囲の環境との関連性の描写を精査することにより、カリフォルニア文学が人間の「内部」と「外部」の境界を攪乱し、ひいては人間（ヒューマン）と非人間（ノン・ヒューマン）の相互関係性を念頭に置いたポスト・ヒューマン的環境思想を提示していることが明らかとなる。カリフォルニア文学に関する先行研究で指摘されるように、カリフォルニアはその豊かな自然環境から、定住者にとって理想的で、人間と自然環境が調和した環境を獲得できるというロマン主義的自然観に基づく言説に彩られた土地である。しかし、カリフォルニア文学の一部には、そうしたロマン主義的カリフォルニア言説に抵抗する視座が存在する。こうした抵抗の諸相は、自然/文明の二項対立的自然観を乗り越える可能性を提示している。

これまでのカリフォルニア文学に関する研究において、カリフォルニア文学の主なテーマが Frederick Jackson Turner のフロンティア概念と密接な関係にあることが指摘されている。特に、荒野において入植者が文明を再構築するプロセスを繰り返すことによりフロンティアが漸進するという Turner の認識は、カリフォルニアにおいて人間と自然が調和した理想的社会を（再）構築したいという人々の欲望を裏書きするものとなり、カリフォルニア文学はしばしば理想化されたフロンティアとしてカリフォルニアという土地を描き出す。すなわち、入植者にとって新たな生活を予感させる理想的な土地としてカリフォルニアはロマン化されてきたといえる。

こうしたフロンティアの概念に付随するカリフォルニアのロマン化は、調和的な共同体を設立するというイデオロギーを基礎とするものである。アメリカ環境思想には自然環境中心主義と科学技術中心主義の二派が存在するとされるが、いずれにせよこれらは人間と

自然環境が調和した世界を企図するという点において一致している。つまりカリフォルニアは、そうした環境思想に基づいて、調和的な共同体を設立したいという外部からやってきた人間の欲望を引き受けているといえる。

一方で、ロマン化されたカリフォルニアのイメージが、人間中心主義的な土地表象であることは否めない。しかしこのような人間中心主義的な土地表象は、カリフォルニアという土地のイメージを矮小化する危険をはらんでいる。Robert T. Tally Jr.と Christine M. Battista が指摘するように、人間中心的な土地表象は、人間と非人間の相互関係性によって成り立つ土地そのものを抽象化し、その土地を人間に従属する対象として捉える認識を助長する可能性がある。

こうした人間中心主義的な土地表象から逸脱し、人間と非人間との相互関連性を再考しようとするカリフォルニア表象を、本研究では「カリフォルニアの脱ロマン化」と捉え、土地表象の可能性を拡大するものとして評価する。このような脱人間中心主義については、Donna Harawayをはじめ、Timothy Morton、Stacy Alaimo、Rosi Braidotti などの環境批評および隣接分野におけるポスト・ヒューマンに関する議論を援用しつつ、本研究では、カリフォルニア文学における、人間の「内部」と「外部」を攪乱しながら他者との関係性を再構成しようとする文学表象を考察する。

第一章では、Upton Sinclair の *Oil!* (1927)におけるパストラルの不可能性を検証する。この作品は、南カリフォルニアの牧歌的風景と石油産業による土地開発との接触を描いた作品である。この作品において Sinclair は自然/文明の二項対立を前提としたロマン主義的自然観に基づくパストラルの概念を前景化する。しかし、そのパストラル描写を精査すると、19世紀的進歩主義がパストラルの理想と相容れないことを示唆していると同時に、石油産業から逃れて純粋無垢な自然を体験するという理想が、20世紀初頭のカリフォルニアにおいてはすでに不可能なものになっていることが明らかとなる。労働者と資本家との対立および社会主義的思想を描き出すこの作品はしばしばプロレタリア文学として分類される。一方で、シンクレアが描き出す自然資源の搾取と石油産業の描写に着目することにより、この作品をパストラルの概念を前景化する環境文学として再解釈することも可能である。特に、石油産業に直接的・間接的にかかわる人間の身体が破壊される描写を検証することで、石油産業の影響から逃れて手つかずの自然へと逃避することが20世紀初頭のアメリカでは不可能になっているということが明らかとなる。すなわち *Oil!*は、自然/文明の二項対立に基づく自然認識はすでに成立しないということを早くも20世紀前半に示唆した点において重要な環境文学作品のひとつとして再評価できる。

第二章では、John Steinbeck の *Of Mice and Men* (1937)を取り上げ、そこに見られる社会的弱者による連帯の失敗の諸相を考察する。これにより、カリフォルニアにおける農業資本主義社会の不寛容性およびカリフォルニア・ドリームの矛盾が明らかとなる。すなわち、より良い生活を求めてカリフォルニアの農場にやってきた渡りの労働者が、実際は農業資本主義のイデオロギーに絡めとられており、彼らの理想は実現しえないのである。特に、農場に

における障害者表象に着目し、第二章では農場社会がその共同体の基準にそぐわない他者を排除し、そうした排除の構造がロマン化されたカリフォルニアのイメージから労働者を疎外していることを明らかにする。George と Lennie が語る、社会的弱者の連帯によって作り上げられるはずのパストラル・ユートピアの夢は失敗に終わるものの、その夢が農場の社会的弱者に希望を与えていることは窺える。しかし、農業資本主義の排他的なイデオロギーが彼らの夢の実現を阻むのである。つまり、この作品におけるカリフォルニアという土地は、夢の実現を約束する理想郷ではなく、農業資本主義のシステムに支配された土地であり、労働者を搾取することで彼らをカリフォルニア・ドリームから疎外する構造を孕んでいるということが示唆される。

第三章では、Jack Kerouac の自伝的小説 *Big Sur* (1962)におけるアメリカン・ウィルダネスの概念に対するアンチ・テーゼを明らかにする。この作品は、カリフォルニア州の海岸地域ビッグ・サーにおける崇高な自然を描くことを通して、アメリカにおけるウィルダネスの概念を前景化した作品である。アメリカにおける対抗文化のアイコンとして崇められた Kerouac は、このビッグ・サーへの旅を若き日の無垢を取り戻すためのものとして位置付けるものの、彼の計画は最終的に失敗する。この作品で描かれるのは、アルコール中毒の譫妄に伴う Kerouac の精神的荒廃である。しかし第三章では、ケルアックの精神的荒廃によって当初の目的が果たせなかったことを失敗ではなく、ウィルダネスの概念を再構築する契機として肯定的に再解釈する。まず、この作品がウィルダネスを描く作品として、崇高な自然を描写していることを確認する。そのうえで、語り手が作中で書く詩“Sea”における海の音（声）に着目し、そこに Kerouac のフレンチ・カナディアンとしての出自を読む。こうしたアイデンティティの感覚は、Kerouac の宗教性とも多分に関わることから、最後に彼の自然描写に見られる宗教性を考察する。以上の観点から、Kerouac の環境意識、および作品における崇高な自然が、アメリカ的ウィルダネスの範疇から逸脱していることを明らかにする。

第四章では、ロマン主義的自然観に対する Richard Brautigan の批判的視座を考察する。彼の第一作である *A Confederate General from Big Sur* (1964)においては、反順応主義的な主人公 Lee Mellon がビッグ・サーでの隠遁生活を謳歌しているかのような手紙を友人の Jesse に送るが、実際の生活は困窮を極めていることが明らかとなる。このことが示唆するのは、ロマン化されたウィルダネス体験の不可能性である。さらに、Lee による「荒野の戦い」の再演は、ウィルダネスが訪問者に対してロマン化されたウィルダネス・イメージを提供する一種のテーマパークの様相を呈していることを暗示する。つまり、Lee による「荒野の戦い」を再演することに伴う強迫観念的精神状態と彼の荒野での生活は、1960 年代のウィルダネス幻想を暴き出すものになっている。また、第二作目の *Trout Fishing in America* (1967)において、Brautigan は自然の領域が文明によって浸食されている様を描き出す。擬人化される理想的パストラルである“Trout Fishing in America”と身体障害者として擬人化される“Trout Fishing in America Shorty”に着目することで、1960 年代のアメリカにおいては、かつてヘミングウェイが描いたような「古き良き」パストラル体験が不可能になっていることが明らか

となる。言い換えれば、そうした「古き良き」パストラルは消費対象となり、消費社会の中で商品として消費されるのである。つまり、Bratigan の初期二作品における強迫観念的精神状態および比喩的な身体描写に着目することで、Bratigan がロマン主義的自然観を脱構築していることが明らかとなる。

第五章では、Cynthia Kadohata の *In the Heart of the Valley of Love* (1992) を取り上げ、そこで描かれる皮膚感覚と環境汚染との関連性を考察する。この作品の舞台となる 2052 年のロサンゼルスでは、何らかの環境要因によって皮下に“black pearl”という異物が現れる皮膚病が流行している。これにより Kadohata は環境との接触面としての皮膚感覚を描き出している。皮膚感覚を通して身体と環境汚染との関連性を認識しながらも、荒廃した地域を「ホーム」と規定して定住しようとする主人公 Francie の姿勢は、規範的文化の側から語られる「汚染」のイデオロギーに対抗する構図を示している。Kadohata による皮膚感覚の描写は、外界からの影響を受容する環境意識を示唆しており、そうした需要の感覚が、最終的に包括的な環境意識へと接続される。すなわちこの作品は、人間にとって不都合な物質すらも包み込むような、いわばロマン主義的自然観に基づく主流環境言説から逸脱する環境意識を提示しているという点において、非調和的エコロジーの可能性を示すものであるといえる。

以上のように、本研究で主に取り上げる作品はロマン主義的自然観に見られる自然/文明の二項対立の枠組みを参照しながらも、そうした枠組みから逸脱しようとする姿勢を示す。これらの作品における身体・精神・環境の関係性を考察することで、これらのカリフォルニア文学が、人間の「内部」と「外部」の境界を攪乱する超身体性を示唆しており、そのことを通じてロマン化されたカリフォルニア・イメージに疑問を投げかけていることが明らかとなる。すなわち、カリフォルニア文学における身体・精神・環境の相互関係性の描写は、ロマン主義的自然観を基にした二項対立的環境意識を乗り越え、人間中心主義的な土地表象から逸脱するカリフォルニア表象の可能性を示唆するのである。